

2023年度 海外研究員成果報告書

- 1, 氏名： 国際関係学部 准教授 宗 ティンティン
- 2, 出張期間： 2023年4月10日～8月20日
- 3, 出張先： 麗江中国大研納西古楽会
- 4, 住所： 中国雲南省麗江市古城区新華街密士巷86
- 5, 調査団体： 雲南省麗江市「麗江中国大研納西古楽会」
中国雲南省红河哈尼族彝族自治州蒙自市「興安所洞経会」、「教場洞経会」
中国雲南省红河哈尼族彝族自治州建水县「文廟古楽隊」、「臨安古楽隊」
中国雲南省大理白族自治州上関鎮「馬場洞経古楽団」
中国雲南省保山市「至善堂洞経会」
中国雲南省騰沖市「和順桂山会」
- 6, 共同研究機関：中国雲南麗江文化ツーリズム学院、中国雲南大学、国立麗江東巴（ト
ンバ）文化研究所、麗江民間芸術家連合会

研究課題

文化遺産納西古楽の楽譜編集と現状調査

研究内容・成果

1, 研究内容

本研究は2001年から始め、この20年間の間、中国雲南省麗江に残された納西古楽を長期間に渡り追跡調査をしてきました。しかし、2019年からコロナウイルスが蔓延したため、約4年間現地調査に行けず、この間に麗江の研究環境はかなりの変化があり、古楽に関する保存の体制や演奏状況も大きな変化を伴っていました。長年調査していた大研楽団はこの四年間で7名もの老演奏家が亡くなり、更に近年、政府のコロナ対策疲労が原因で各楽団に対する補助金も減り、長期間のロックダウンにより政府の財政収入もだいぶ減ってきたと実感しました。ツーリズムコンサートの収入に依存していた多くの楽団もいまだに活動休止となっていました。この環境の中、雲南省麗江に残された「洞経音楽の一種納西古楽」に関する教科書の最後に残された納西古楽の「位置付け」という労力と財力がかかる重要な章の作業は招へ側の大研納西古楽会からの依頼も受け、私が担当することとなりました。麗江洞経音楽の記録調査をしつつ、「採譜」（聞いた音楽を楽譜にする作業）と参与調査を主とした調査方法で、雲南省境内に残された洞経音楽の老演奏家たち「口伝」に頼ってきた継承法の調査による麗江納西古楽との比較という研究内容とすることになりました。麗江の洞経音楽（別名：納西古楽）と他の地域の洞経音楽の楽譜、楽器、継承法に対する比較研究は今までの先行研究がまだなく、今後出版される納西古楽の教科書は多くの洞経音楽の中でのどのような位置付けになるか、そして貴重な学術価値と独自性を明らかにする研究調査となりました。

2, 研究経緯

「洞経音楽」は中国明時代に盛んになった道教儀礼音楽であり、その後長い間、科学試

験に参加していた文人たちによって保存と演奏されてきた明朝宮廷音楽一種であります。元々漢民族地域演奏された音楽ですが、戦争や王朝変遷の関係で今では珍しく中国の少数民族地域の雲南省や四川省の一部の地域に残されました。今では演奏者の平均年齢が高く、消滅寸前と判断された結果、中国雲南省非物質文化遺産リストに登録されている重要文化財になりました。

長年調査してきた麗江洞経音学「納西古楽」は、省都の昆明から500キロ離れている山岳部に閉じ込められたことで他の地域の洞経音楽より楽譜や楽器は最も古く、明の時代に近いと地元の研究者に推測されてきました。しかし、この説は同じ雲南省の他の地域に残された「洞経会」から否定された事もしばしばあり、自分のところから楽譜が麗江に伝わったと強く主張している楽団もあったため、今回私はその説を疑問に持って、参与調査を長年してきた自分の見解と経験を持ちながら、この説は本当かどうかを確かめるため、そして麗江の洞経音楽の位置付けを定着するために以下の楽団を訪問調査と参与調査をしてきました。このような遠距離を跨いだ雲南省境内代表的な洞経楽団に楽器を持って一緒に演奏する（参与調査）ことを実行する人は初めであり、フィールドワークで得た成果も大変学術研究の信頼性も高いと各アカデミック機関に期待されています。その点についても本研究の特色とも言えるでしょう。

2. 参与調査実施経緯

- ・4月11日～5月11日 中国雲南省麗江市「麗江中国大研納西古楽会」（招へ側）

資料収集及び楽団の演奏環境調査を実施、滞在中に麗江市非物質文化遺産研究所や国立麗江東巴（トンパ）文化研究所を訪ね、学術交流をおこなっていました。その他には納西古楽会の演奏会や様々な儀式にも参与調査を実施し、楽譜の採集から楽譜のまで様々な作業を行っていました。

↓ 麗江～昆明 （500キロ）

- ・5月15日～6月1日 中国省昆明市にて滞在、雲南省政府海外連誼会への調査紹介状の依頼とスケジュールの調整をしていました。その他には雲南大学芸術とデザイン学部邱健教授との共同研究も行われました。

↓ 昆明～大理 （373キロ）

- ・6月12日～6月22日 中国雲南省大理白族自治州上関鎮「馬場洞経古楽団」と「大理双廊鎮古楽会」を調査、主に楽譜の記録や使用されている楽器の特徴及びツーリズムコンサートの取材などを行われていました。

↓ 大理～蒙自 （624キロ）

- ・6月23日～6月30日 中国雲南省红河哈尼族彝族自治州蒙自市「興安所洞経会」における調査。毎日教場寺で行われた大洞仙経の儀式を見学し、会長である雲南省重要継承人の段先生のインタビューをしていました。この調査にて貴重である蒙自地区の洞経音楽の楽譜や資料を入手していました。

↓ 蒙自～建水 （78キロ）

- ・7月1日～7月10日 中国雲南省红河哈尼族彝族自治州建水县「文廟古楽隊」、「臨安古楽隊」を調査実施、この期間中では中国の学校の夏休みと重なり、文廟では様々な学

生向けの儀礼儀式が行われました。この調査によって普段では見聞きできない洞経音楽の演奏や儀式全般の過程などを取材することが出来ました。建水の洞経音楽は孔子の儒教思想の影響を濃く色濃く受けており、演奏全体の雰囲気は他の地域と大きく異なり、大変特色のある演奏だと初めて知りました。

↓ 建水～保山 (680 ㌾)

- ・7月10日～7月16日 中国雲南省保山市「至善堂洞経会」と保山人民政府を訪問し、意見交換会と現地フィールドワークを実施しました。保山はミャンマーの北部に隣接し、危険区域とも呼ばれていたため、ここでの取材はすべて政府の協力を得て実施することが出来ました。調査をしていた「至善堂洞経会」は平均年齢78歳で会員の数や儀式、儀礼音楽の演奏方法と設置は最も伝統的であります。

↓ 保山～騰沖 (149 ㌾)

- ・7月17日～7月27日 中国雲南省騰沖市「和順桂山会」におけるフィールドワークを実施しました。ミャンマーとの国境線に最も近い地域の洞経会であり、政府の協力の下で私の調査の為に会員達は三日間も集めてくれて、演奏会と意見交換会に成功しました。騰沖の洞経会に使用された楽器や楽譜の多くは逆輸入でミャンマーの華僑団体から贈呈されたものが主流となっていました。

↓ 騰沖～麗江 (506 ㌾)

- ・7月28日～8月19日 麗江に戻り、この三か月現地フィールドワークで収集された資料を整理し、納西古楽との比較に関する論文の執筆を行っておりました。

3. 研究成果：

上述のように雲南省境内に現存する洞経楽団を全面的に参与調査実施していた研究者は初めてであり、その研究発表の一つとして「麗江文化旅遊学院」(麗江文化ツーリズム学院)「第四回天雨流芳シリーズ講座」で講演をし、その後本大学の学長から「終身名誉教授」を任命されました。今回の海外研究に行く前に設定していた目標の一つである「今後本学の学生と中国西南地区の大学との交流のためのパイプ作り」これで円満に達成できたと思います。今後毎年ゼミ生を引率し、世界遺産の街に位置する大学と交流できることを大きく期待しています。

4ヶ月に渡ってのこの貴重な海外研究のお陰でまとまった調査ができ、その際に得た資料に基づいて、今すでに中国語と日本語での論文の執筆を始めました。秋学期に日本と中国の学術論集に投稿する予定です。目指していた納西古楽に関する教科書の完成については大きな一歩を前進し、老演奏家たちが生きている内に多くの楽譜も集め、納西古楽の位置付けを定着することも出来ました。

音楽人類学の研究にとっては音楽専門家の耳と演奏技術を用いながら、人類学の調査法と視野を使用する現地調査は何よりも重要なアプローチであり、今回の海外研究は無形文化遺産である納西古楽研究に斬新な世界を切り開くきっかけとなり、洞経音楽の保存と継承に大きな貢献になると確信しています。

2023年9月19日執筆